

を現す言葉に訳されていますが、本来は心のありさまを現す言葉であったのだと思います。今の私はケアを、「生命あるものに関心を向けて、その生命が滞りなく維持されるように働きかけること」と解釈して納得しています。医療の分野では、治療、訓練、検査などが病気や障害そのものを治癒させたり、取り除いたり、改善したりしようとする働きを担っていることに対し、ケアはこれらの問題に直接に働きかけるのではなく、問題を持つ人に働きかけることを第一義として、治療や訓練と一線を画しています。病気、障害、苦痛、死など、人が遭遇する困難に対して、その人が安心して、あるいは勇気を持ってこれらに向き合えるようにするのがケアです。

ですからケアには「何をやるもの」という定義がないのだともいえます。医療者のなかでもケアを本分とする看護師が、他者からも、また自身たちからも「何を仕事とする者なのかがはっきりしない」と批判された

り自覚したりすることがありますが、改めて考えてみるとそれは当然のことであって、対象によってさまざまな行動となるのがケアなのだと思います。庇護、保護、支援、支持、育成、啓発などはいずれもその人へのケアの形であり、これらが観察、注意、緩和、教育、配慮、理解、共感、工夫、説明、指導、世話、代行、調整などという具体的な行動として現れます。私はこれらの行動を代表して一言で「適応支援」という言葉で表わすことにしています。もちろん治療や検査が適応を達成することの方法であれば、ケアを本分とする看護師はそのことに力を尽くしますし、治療を主導的に進めていく医師への協力を惜しみません。その人が困難に向き合うこと、つまり適応することをめざし、その人の状態や状況に合わせて変容する。固定されず動的、さらにいえば躍動的。つまり Dynamic であること。これこそがケアの本質であると理解しています。

考えます。1つは3領域の問題とこれに対応する方法の共通性です。W・O・Cケアの中心となっているのはオストミーケア、つまりストーマケアです。ストーマケアは最大の合併症である皮膚障害を皮膚被覆剤による閉塞性湿潤法によって解決してきましたが、同じくこの方法を問題の解決法の1つとする創傷ケアと手を結び、また一方で人工的な失禁であるストーマという状態や、ストーマ造設術後の失禁と共通する問題を持つ、病的あるいは加齢的な失禁をケアする失禁ケアと手を結びながら、W・O・Cケアという1つのケア分野を造っていきました(図2)。私は3つのケアがストーマケアを真ん中にして手を結び合い、器械体操の扇のように開いているイメージを持っています。この3つのケアは共通する知識、理論、技術のうえにそれぞれのケアの経験や情報を循環させて、相互に利用しあっています。それは蓮など地下茎を持つ花が地下で同じ茎でつながり、同じ土壌、同じ養分と水分で育ち、美しい姿をみせることに似ています。

がん患者の W・O・C ケア

がん患者のプロセス

がんは生命の正常なシステムから逸脱して、無秩序な増殖、浸潤、転移を起こす細胞が、人体のさまざまな臓器や器官などを侵す疾患で、その治療には手術療法、薬物療法、放射線療法などがあります。しかしこれらの治療はがん細胞組織を取り除くこと、増殖を抑制することを目的としており、現段階ではがんという疾患の根本的な問題である生命システム異常を治しているわけではありません。したがって治療しても進行、転移、再発、新たながんの発生などの危機が残る続けるために、がん患者は治療するにしても、進行するにしても、発見から治療、あるいは終焉までに数年以上のプロセスを辿ることになります。

がん患者は、生還や死というきわめて重大な結果

を常に見つめながら、自分自身の目標や希望を定め、治療、再発、転移、進行などの予測できる結果を考え抜き、多くの決断を行い、これを実行することになります。このことはがんに罹らなければ経験しなかっただろう人生の厳しさでもありますし、また、死によって人生を得ている人間にとって、「自分は終焉までどう生きていくのか」という人生観の明確化は、がんという病気がもたらす恩恵でもあるでしょう。

Dynamic W・O・C ケア

このドラマティックともいえるがん患者のすべてのプロセスに、W・O・Cケアはさまざまな形で働きかけています。これほど多様で躍動的なケア分野はめずらしく、まさに“Dynamic W・O・Cケア”といえます(図1)。

W・O・Cケアが Dynamic である理由は2つあると

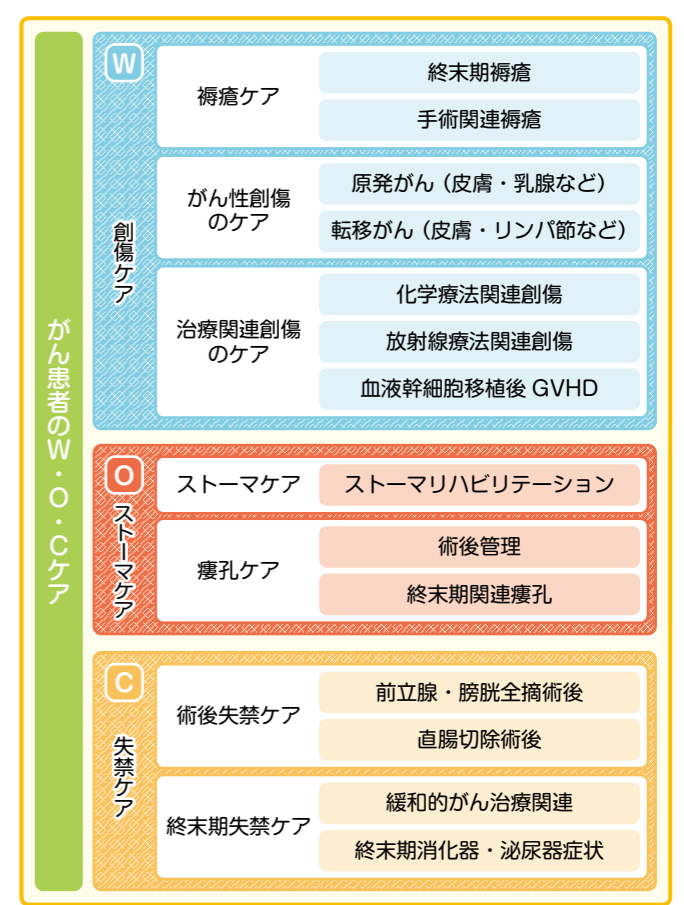


図1 Dynamic W・O・Cケア

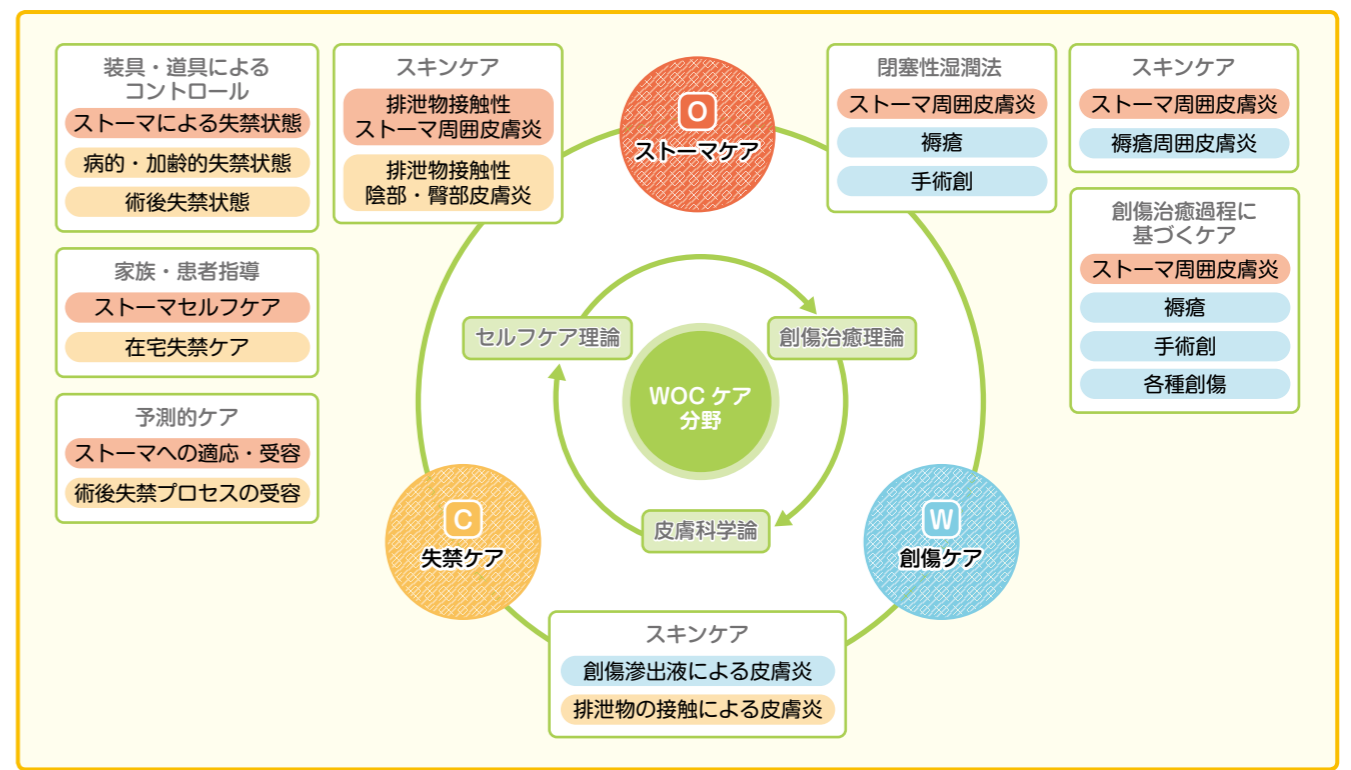


図2 “W”・“O”・“C” ; 3つのケア領域が作る WOC ケア